

研修名 造形遊び研修

平成28年7月11日(月) 10:00~16:00

講義 「絵を通してみる子どもの育ち」

演習 「わくわくする造形遊び」

講師 聖徳大学 奥村 高明 氏



1 「絵を通してみる子どもの育ち」

1) 子どもの絵の指導

① 子どもにとっての絵とは何か

- ・大人の思う絵とは違う。低年齢児の動きの中から絵が生まれている。
- ・「画用紙」に「クレヨン」だけが表現方法ではない。
- ・大事なのは能力を伸ばすこと。そしてその成長を親に伝えること。
- ・経験や成長とともに必要な能力(技法)は身についていく。
- ・「絵を育てる」のではなく、園での生活や経験を豊かなものにしていくことが大切である。

② 子どもの絵は正確

- ・絵の良し悪しを見るのではなく、子どもがどのように能力を発揮できているかが大切である。
- ・子どもは自分の感じたことをしっかりととらえて描いている。子どもの絵に「間違い」はない。その子がそう描くにはちゃんと理由がある。(合理的で論理的)

③ 環境の構成

- ・3歳児にとっての最も適切な紙の大きさは?大きすぎているか。紙の大きさは描画材と手の動き、題材との関係で決まる。(牛乳瓶のふた、四つ切画用紙など)
- ・本当は「絵が苦手」なのではなく、大人の用意した「手立てが苦手」。
- ・行為の中から子どもの発想や技能は生まれる。出来上がった作品や絵を重視するのではなく、そのプロセス(考えたり、表現しようとしていること、表現方法など)を大事にすること。

④ 題材づくりのコツ

- ・ほんのちょっとまかせる。イメージが膨らむ言葉掛けを意識する。

2) 子どもの見方 (子どもを捉える視点)

- ・子どもの視線を見る～子どもが何を感じ、考えているか分かる。
- ・子どもの手元を見る～子どもが道具を効果的に用いたり、思考したりしていることが分かる。
- ・子どもの動きや姿勢を見る～材料、黒板、机など学習していることが分かる。
- ・子どもとの対話を見る～子どもは学び合いながら学習していることが分かる。

※絵をその子に身を重ねるように見て、子どもを捉え、そこから指導を工夫する。

「なぜ?」という威圧的な問いより、「どこを見てそう思ったの?」などやわらかい言葉かけを意識する方が良い。

子どもの表現したいこと、感じていることは、視線の動きや直後の動きで読み取ることができる。それを見逃さず、援助することが大切である。

3) 子どもの絵の見方

①子どもの絵を上手に読み解く。

- ・近づく(離れて全体を見るより、近くで部分を見る。子どもの描いている距離で見る)
- ・たどる(順番をたどる、プロセスを再現する)
- ・考える(作文や題名、対話などを手がかりに、表現したいことや思いを読み取る)

②子どもと上手に語り合う。

- ・「出来たね」とまず子どもと視線を合わせ、出来た喜びを共有し、それから作品を見る。
- ・「上手だね」「全体を褒める」ことは避ける。ポイントは「部分」。その子が表現したかった部分をしっかり読み取る。
- ・言うより聞く。(相槌、オウム返し、具体化など)
- ・感じたことをそのまま言葉にすると良い。「気持ちいいなあ」「飾ってみたいなあ」「もっと見たいなあ」など。

4) まとめ

「かけがえのない存在」とは誰か。

思ったことや考えたことを表現し、それを認めてもらう経験を積み重ねることで創造性や自信につながっていく。自分の表現したことを認めてくれる保育者は、とても大切な存在である。

2 「わくわくする造形遊び」

1) 手作り絵の具

- ・チョークを削って、水・のりを混ぜて、自分のオリジナルの絵の具(色)を作ろう。

2) 帽子を作ろう

- ・針金で頭の型をとり、アルミホイルを巻き、世界で一つしかない帽子を作ろう。

3 感想

今回、実際描かれた絵や、活動している動画を見せてもらいながら、見る視点や気づきのポイントを分かりやすく教えていただいたり、考えたりすることで、学ぶことがとても多くありました。特に今まで気づかずに見逃していた「子どもの絵を見る視点」を知ることができ、今後、今まで以上に子どもの絵、思いに寄り添っていきたく感じました。絵や作品のどこに目を向けていくか、何を大切にしていくか、どこを見て援助や工夫をしていけばいいか、など、学んだことを生かしていきたいと思えます。

(記録 京丹後市立島津保育所 梅田 英里)

